

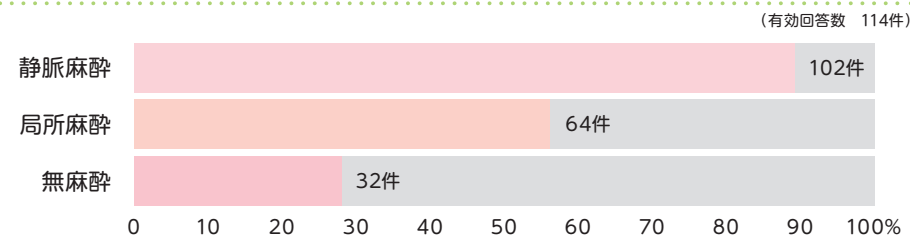
採卵は体外受精にとって大きな山場です。採卵周期で患者さんごとに卵胞をいかに育て、良い卵子を採卵できるかで、その後の治療が左右される可能性があるからです。複数個の採卵から複数個の胚が確保できれば、複数回の移植も可能です。良質な卵子が得られれば、他にマイナス因子がない限り単数でも妊娠の可能性は期待できるでしょう。

医師は患者さんと治療計画を立てますが、計画は、採卵結果によってもその方向性が変わることもあるでしょう。それくらい採卵は重要なものです。採卵は不妊治療で最も大きな手術です。では、どのように採卵は行われているのでしょうか？

手術は、手術室で医師と看護師と培養士らがチームを組んで臨みます。看護師と培養士がそれぞれに必要な機材を準備し、患者さんの卵巣をモニターで映し出し、医師が卵胞液を吸い取るチューブのついた採卵針を経腔から挿入し、腔壁から卵巣内の卵胞へと通し、卵胞液ごと卵子を吸い取ります。吸い取った卵子は、培養室で検卵します。採卵数によってこの回数が増えます。患者さんごとに違いがありますが、術後は、患者さんの経過観察も含め、安静室で休む時間を設けています。麻酔の種類によっても時間が変わります。平均2時間ぐらいが多いようです。

Stage
04-1

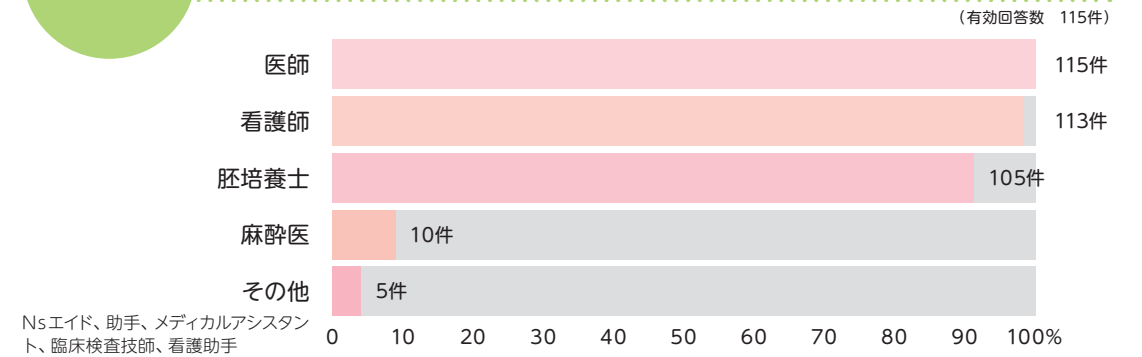
採卵時の麻酔



採卵時の痛みについては、採卵針の太さなども影響しています。針の先が細い方が痛みは少ないといわれていることから、無麻酔の場合の採卵針は比較的細いようです。かといって、細すぎると卵子に傷をつけるのではないかと心配もあり、ほどよい太さで、(無麻酔でも我慢できる痛みとはいえ)痛みが緩和でき安心して採卵に臨めるよう、9割が静脈麻酔を使用している様子うかがえます。局所麻酔使用という施設は半数強あり、無麻酔とする治療施設は32施設ありました。3割近くで無麻酔での実施があることには少し驚きました。

Stage
04-2

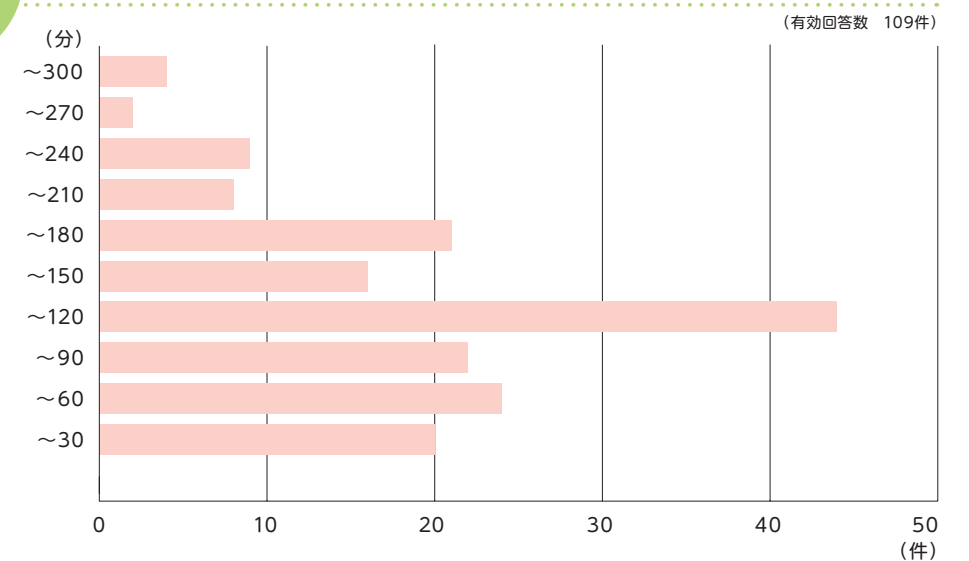
採卵時のスタッフ



採卵時のスタッフは、医師が100%全施設で担当していて、看護師が113施設、胚培養士が105施設でスタッフ参加しているとの結果でした。麻酔医は10施設。このことから医師と看護師、培養士が基本的に参加して、手術に臨むことがわかります。それに麻酔医が1割弱のケースで参加しています。その他では、助手やメディカルアシスタントがあり、安全への配慮を大事にする様子もうかがえますが、気になる看護師と培養士の参加がない施設からの回答では、おそらく医師と培養士、もしくは医師と看護師の2職でカバーしているものと思われます。

Stage
04-3

採卵後の休憩時間



採卵後の休憩(安静)時間は、2時間前後が多いようです。経過観察もあり、採卵後の腹痛や出血、体調の変化などの有無、また患者さんそれぞれの希望によっても違いはあるかと思えます。30分以内も多いのですが、全体として3時間を超える場合は、かなり少ない件数となります。